

平成 23 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」
共同利用型の研究成果報告書

加藤久子（國學院大學日本文化研究所 PD 研究員）

申請者は、2013 年 3 月に 1 週間、スラブ研究センターに滞在し、「資源化する『連帯』の記憶～現代ポーランド政治のなかの労組『連帯』」というテーマに基づき資料収集を行った。センター図書室と北大図書館本館にて、1980 年代の *Życie Warszawy* と *Polityka*、および近年の *Wprost* を中心に閲覧した。

現在のポーランドの与党「市民プラットフォーム」および最大野党「法と正義」は、ともに労組「連帯」を母体としており、両党の政治的レトリックにおいては「連帯」の遺産について頻繁に言及される。特に、2010 年 4 月の政府専用機墜落事故後の大統領選挙キャンペーンにおける与野党の激しい対立において、それが顕著となった。今回得た資料は、体制移行後の「連帯」をめぐる言説の変容について歴史社会学の視点から分析するために活用したい。

伝統や文化が所与のものではないのと同様、歴史についても、常に取捨選択が行われ、現在の地点から再解釈されているという指摘は、もはや新しいものではない。このような再解釈は、内政のみならず、国際的な舞台における自己演出にも大きな影響を与えている。今回得た資料は、昨今「民主主義はポーランド最大の輸出品」というスローガンを掲げ、開発援助国への転身を図ろうとするポーランド政府の野心のもとで、「連帯」の記憶がいかに資源化されようとしているかについて調査を進める手がかりにも成り得ると考えている。

また、「連帯」に関しては 1980 年代の *Życie Warszawy* と *Polityka* を閲覧し、気になる点を確認できたことも収穫であった。*Życie Warszawy* については、事前に OPAC で新聞、雑誌の所在を確認したところ、「スラブ研・新聞室」と表示されていたため、事前に図書室に連絡しなかったのだが、実際には古い新聞は倉庫に保管しており、容易に取り出せないとのことで冷や汗を流すこととなった。急遽倉庫から運び出す手続きを取っていただいた兎内さんのご配慮に心から御礼申し上げます。

センター滞在中、東欧ゼミ、非常勤研究員セミナー等に出席する機会を得た。家田先生はじめ、お声掛け下さった研究員の皆様、滞在を支援して下さったスタッフの皆様を含め、貴重な機会を与えて下さったスラブ研究センターに感謝の意を表したい。